

「環境科学フォーラム」

～環境科学研究科同窓会の活動～

(同窓会会長) 香 川 重 善

10年ひと昔、年月のたつのは早いもので、筑波大学大学院環境科学研究科の修了生は昭和63年3月で10期生となりました。環境科学の同窓会は環境科学研究科長を名誉会長とし、研究科の修了生、教職員、現学生等、筑波大学の研究科に関係を持った人々で構成しています。当初は会員名簿の作成が中心でしたが、昭和61年に会員のデータ・ベース化が完了し、筑波事務局の人的拡充もあり、除々に会報誌の発行へと体裁を整え、学問的・職業的・分野を超えた情報交換の場として「環境科学フォーラム」を全員各位のお手元にお届け出来るまでに成長致しました。会員数は修了生(1期～10期)約700名、現役学生(11期～12期)そして教職員(客員会員)関係を含む、約1000名にならんとする環境科学の同族的大集団となっております。

同窓会の発足には柳・緒方両元技官(1期生)他、1～4期生を中心とする設立準備委員会の尽力によるところが大であります。さらに歴史を遡ると昭和53年5月、2期生を迎えるに当たり自然環境研究会(新藤・天田・安仁屋先生グループ)が作成した「環境科学研究のしおり」(新入生歓迎オリエンテーション用小冊子)には、環境科学設立後1年間の教員と学生(1期生)が一同と成った、新しい学問への挑戦と討議の跡が今日でも目に新しく残っています。次いで、昭和55年12月発行の「環境科学紀要」には、1期修了生のその後が編集されています。そして昭和57年9月11日、東京にて第1回の同窓会総会が開かれ、設立準備委員会案が承認され、同窓会が正式に発足となりました。

大学院とその修了生を時代の糸で結び、相互により密接な情報交換を行い、大学と社会の両者の広い視野からの問題提起と解決、時代の選択など会員の研究と実践を通じ相互の学習と成長の場とすることを、本会の目標に掲げています。情報化時代が叫ばれ、映像と活字の氾濫の時代の中でより確かな情報とその活用は、信頼される人間関係に於てのみ存在します。その様な人間関係と情報交換・啓発・指導等が気軽に期待出来る会と組織でありたいと願っており、大学教職員(客員会員)のご指導およびご意見を特にお願ひするもので、同窓会行事もほぼ定例化し、次の様となっております。

- 4月 新入生オリエンテーションへの参加
- 9月 総会・シンポジウム・懇親会
- 12月 会報発行

今日の一人一人の生き方を包む日本の経済社会環境は、円高による日本の急激な国際化を含め、歴史的な感動の瞬間である事に気づかれると思われます。来るべき21世紀の新しい社会のために、あらゆる人々が変革を迫られている様に感じます。環境科学についても同様でしょう。実践として総合科学としての環境科学から、専門性の環境科学へ、そして環境科学思考を包括する人間科学の時代へと、急激に変化しているその瞬間である様な気がします。そんな中で、平凡な1人1人が常に新しい社会と環境に適応するため、研究と学習を続けなければならない学習の時代であると言えます。つまり、1つの専門や過去の経験だけに頼っては生きて行けない社会です。この様な意味合いから、次の様な期待を環境科学に持っています。

- (1) 昭和64年度に夜間大学院としての生涯開発研究科が、教育大跡地に開設される。実践科学としての環境科学研究科にも、ユニークな博士過程の設立が早期に必要と思われます。
- (2) 過去10年間の実践的環境科学研究を踏まえ、新しい生涯学習の時代に対応可能なインテリジェント・スクールとしての環境科学への変革が期待されます。